

## 当院の血糖 POCT 機器の院内導入と運用について

◎坂井 範子<sup>1)</sup>、鈴木 光一<sup>1)</sup>、佐藤 真由美<sup>1)</sup>、小倉 紀子<sup>1)</sup>、関口 久美子<sup>1)</sup>、米山 里香<sup>1)</sup>、宮城 博幸<sup>1)</sup>  
杏林大学医学部付属病院<sup>1)</sup>

【はじめに】2018年に医療法の一部が改正され、ベッドサイドで使用する検査機器も精度管理が必要となり、当院でも SMBG 機器 (Self Monitoring of Blood Glucose) から精度管理を行える POCT 機器 (Point of care testing) に変更した。今回その経緯と運用について報告する。

【使用機器変更に関する調整】2021年より糖尿病療養チームと看護部、臨床検査部で導入計画と進捗について月1回血糖 POCT 会議を行っている。

機器選定は臨床現場の看護部での使用の簡便性、検査部血糖測定機 (アークレイ ADAMS Glucose) との相関、精度管理記録の一元化管理を考慮しテルモ社のメディセーフフィットプロⅡに決定し、導入に際して検査部は標準作業書、作業日誌の作成、精度管理、機器トラブルの際の対応手順を作成し、看護部は院内使用部署の使用台数の調整、病棟での運用手順書の作成をおこなった。

【運用方法】各病棟の看護師は1日1回機器の使用前点検を作業日誌に記録、2濃度のコントロール液の測定結果を NFC (near field communication) にて検査部管理サーバー

へ転送を行い、検査技師は各病棟の精度管理状況を確認し未実施機器に対して問い合わせを行う。

導入後病棟へのラウンドは月1回、糖尿病療養指導士4名を含む6名が担当し POCT 機器の使用状況の確認、4濃度のコントロール液の測定、作業日誌、SMBG 機器の回収、精度管理記録の保存を行う。

【運用実績】2022年に糖尿病内科病棟で説明会および機器教育訓練を行い運用開始した。内科病棟導入後各病棟へ聞き取り調査を行い Q&A 方式で回答を作成し 2023年8月の全病棟に対しての全体説明会で周知を行った。2023年11月現在 32部署 120台で運用を行っている。

【まとめ】2022年度の SMBG 機器の精度管理台数は 205台であったが POCT 機器導入に伴い病棟部署に関しては約 130台と大幅な減少が可能となった。運用に関する問題点、トラブル記録に関しての詳細については発表時に提示したい。